

運営担当より

2016年4月例会は発表者が一人だけでした。4月例会の発表者が定数に達しないのは過去5年で3回目のことです。学会ニューズレター第22号(2014年)の「編集後記」で渡邊淳也さん(筑波大学)が次のようにお書きになっています。「例会や研究会で、自発的に発表を希望してくださる方が少ない状況です。[...]昨今のきびしい競争のなかでもなお自発的な発表希望者が少ないことには、危機感をいだかずにはられません。研究者としての自己の存亡をかけなければならないはずの若手(大学院生をふくむ)が、打診をうけてからようやく重い腰をあげるのは、考えてみればおかしなことです。もちろん、だれにでも、そのときどきで直面している困難はあるでしょう。しかし、「よほど余裕のあるときだけ、機会をえらんで舞台に立つ」という態度では、当人だけでなく、フランス語学界全体の衰退しか展望できなくなります。いまや、謙遜はまったく美德ではありません。」実は、当の渡邊淳也さんを発表者としてカウントしなければ、4月例会の発表者が定数に達しないのは、過去5年で4回目となり、うち発表者ゼロが1回となります。そして、実は、渡邊淳也さんから紹介された発表者をカウントしなければ、・・・いや、もうやめておきましょう。

どうしてこんなことになるかと言うと、一つには、美德の欠如した会員、と言って悪ければ「謙虚」な会員が多いから、ということがあるでしょう。しかし、原因はそれだけではありません。なぜなら、2016年度は、5月例会以降の発表者は順調に決まっているからです。4月に欠如していた美德が5月以降には回復するというのもおかしな話です。では、毎年4月例会の発表者数が低調なのはなぜか？それはおそらく、2016年になってから2016年の研究(活動)計画を立てはじめ、2017年になってから2017年の研究(活動)計画を立てはじめ、etc.という会員が多いからではないかと思えます。このように考えると、「4月は準備が間に合わなそうだ。それなら9月あたりで」となるのもうなずけます。

しかし、これは特に若手研究者に伝えたいことですが、たとえば2017年の研究(活動)計画を2017年に立てはじめたのでは遅いのです。たとえそれが2017年元旦であってもです。2017年元旦に「9月例会で発表しよう」と決意したとします。たぶんその決意には「夏休みを使って準備しよう」という決意も含まれるでしょう。そして9月例会一週間前に発表要旨をひととおり書き、発表資料を当日までになんとか仕上げれば、いちおう発表は成立します。ところが、このときの発表と質疑応答に基づいて論文を執筆して投稿し、仮に採択されたとしても、公刊されるのは2018年の半ばです。これだと2017年の論文業績はゼロです。このゼロが響いて、教員公募等に応募できないかもしれません。「論文ゼロ」の年を作るのは研究者にとって自殺行為です。

以上のように簡単にシミュレーションしてみると、2017年の元日の時点ですでに、2017年の研究業績が決まっていることがわかります。研究者にとって「一年後(の自分)」は「未来」ではなく「現在」なのです。どうか、2016年の早い時期から、2017年のご自分の研究業績を思い描きながら、研究(活動)計画を立てていただきたいと思います。そうすれば、2017年4月例会はすぐに定数に達することでしょう。

冒頭に引用したニューズレターで、渡邊淳也さんはこうもおっしゃっています。「ほかの学会では、発表希望者に 概要[=発表要旨]を提出させ、査読でふるい落とししているところもあるというのに、われわれの学会では、運営側が発表者の掘り起こしに腐心しているという現状があります。」仮に発表要旨に対して審査が行われるとすると、遅くとも例会発表の3ヶ月前には発表要旨が完成していなければなりません。これは文字通り「完成」でなければならず、「～の問題を扱う予定である」といった不明瞭な要旨はもちろん不採択です。研究発表にとって3ヶ月後は「予定」ではなく「確定」なのです。

もう今年は半分終わってしまいましたが、いまからでも「未来」を「現在」に、「予定」を「確定」に変えることを今年の目標にしてみてもいいでしょうか？ (酒井 智宏)